

松 山 大 学 論 集
第 20 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 0 8 年 12 月 発 行

英米文学鳥類考：スズメについて

榊 田 隆 宏

英米文学鳥類考：スズメについて

榊 田 隆 宏

1

スズメ、カラス、ハト、全て人間に身近な鳥だ。なかでも、スズメはその筆頭だ。ピーター・ミルワード氏の言う通り、「世界じゅうどこへ行ってもいないところのないのがスズメというものだ」¹⁾だから、誰でもスズメを「知っている」と言う。人家の周辺で目にする、姿も声も地味な小鳥だ。ところが、この一般常識には思わぬ落とし穴が潜んでいる。というのは、英米人が日常「スズメ」と呼んでいる鳥など、我が国には何処にも生息していないからである。では、我々が常日頃「スズメ」と呼んでいる、あの鳥は一体何なのか？ ここが門外漢の興味をかき立て、必ず「どうして？」とくる。でも、その答えは実に簡単である。スズメはスズメでも、種が違うのである。その違いは、学名と英名を見れば一目瞭然である。

日本の《家スズメ》は、学名=*Passer montanus*「山スズメ」；英名=*tree sparrow*「木スズメ」である。これに対して欧米の《家スズメ》は、学名=*Passer domesticus*「家スズメ」；英名=*house sparrow*と文字通り「家スズメ」であり、和名でも「イエスズメ」と言う。付言すれば、ラテン語の学名では「山スズメ」なのに、英名では「木スズメ」に変わっているのは、多分英国の地勢学的理由によるものではあるまいか。ちなみに、英国で *sparrow* という名の付く鳥は、上記の2種以外に *hedge sparrow* がある。でも、この鳥はスズメとは異なる「ヨーロッパカヤクグリ」というイワヒバリの一種である。

と見てくれば、ここでまた新たな疑問が浮上する。日本のスズメは、誰が見

ても人家の周辺に住んでいる。なのに、なぜ学名では「山スズメ」、英名では「木スズメ」と呼ばれているのか。その答えもまた簡単である。横文字の鳥名は、ヨーロッパを基準に付けられているからである。この〈名〉と〈実〉の違いについて、本邦の『野鳥ガイドブック』に分かり易い「豆知識」があるので紹介したい。

スズメの学名が「山にすむスズメ類」というのはおかしい。しかしヨーロッパでは山にすんでいる。町にはスズメよりやや大きいイエスズメがすむ。分類的に近い種が同一地域にすむときには、異なった環境にすむ。いわゆるすみわけだ²⁾

この点について、スズメ学者の大田眞也氏は次のように具体的に述べている。

スズメの分布とイエスズメの分布が重複しているヨーロッパなどでは、イエスズメが日本のスズメのように人の居住地にすんで人家の軒下などに営巢している。一方スズメは、英名のツリー・スパロウ（木雀）や学名のパッセル・モンタヌス（山雀）が示すように人の居住地から離れた山林にすみ樹洞などに営巢している³⁾

つまり《日本のスズメ＝学名「山スズメ」；英名「木スズメ」》は、ヨーロッパでは文字通り「山林に住むスズメ」なのである。この「山林のスズメ」が何故に本邦では《家スズメ》に化けるのか。それは、我が国には「イエスズメ」が生息していないからである。だから、欧米諸国で現地の人が「スズメ」と呼ぶ鳥を見て、一瞬「何か違う？」と首を傾げる鳥通の日本人が居たとしても、それは無理からぬことである。とはいえ、この現象も、もはや時間の問題かも知れない。というのも、唐沢孝一氏は次のように述べているからである。

近年におけるイエスズメの分布拡大の傾向は凄まじいものがある。やがて日本や中国といったスズメの独占地域にも進出してくる勢いである……今、世界各地に分布を拡大し、シベリアの東端にまで達したイエスズメが、やがてサハリンを経て北海道へと進入してくるかも知れない。日本の大都市はコンクリートで固められ、ヒートアイランドと化して、今や乾燥したサバンナの気候を呈していると指摘されている。乾燥した環境に適応し、ムギ栽培の拡大に随伴して分布を拡大してきたイエスズメにとっては、日本の都市は魅力的な環境であろう。同じ集落に二種類のスズメ属の鳥は同時に生息しないという種間関係を考えると、古くから人家周辺に棲みついている日本のスズメの将来が気がかりでならない⁴⁾。

以上の点を踏まえた上で、日本の《家スズメ》と英・米の《家スズメ》について今少し具体的に見てみよう。この2種のスズメの違いについて、井上義昌氏は次のように述べている。

① tree-sparrow (全長 14 cm〈ヨーロッパ〉スズメ) 略称は単に「スズメ」。雄雌同色同大。この鳥は色彩が日本の雀に最もよく似ているし、学名からいっても同じ種類で亜種名だけが違っているにすぎないから当然略称として「スズメ」という名を享受すべきである。英国に生息するものは留鳥で、日本の雀より幾分野性が強いようである。

② house-sparrow (全長 15.20 cm イエスズメ) 頭冠部^{でん}と臀部^{でん}とは青味を帯びた灰色、のどから胸部にかけて、やや扇形をなす黒色の大斑^{たいはん}がある。house-sparrow はその名の示すように常に人家のある所だけに生息し、煤煙の立ちこめた工場地帯でさえも平気で生息している⁵⁾。

では、「日本には《家スズメ》に対する(山林)スズメは居ないのか」と言

えば、居ないわけではない。これが本邦に生息している今一つのスズメ、「ニュウナイスズメ」である。このことを念頭に置いた上で「スズメ」、つまり我が国の《家スズメ》について専門家の解説を見てみよう。

スズメ (tree sparrow || *Passer montanus*)

スズメ属に属し、イエスズメに近縁の小鳥だが、雌雄がたいへんよく似ているという特徴がある。日本にいるスズメはこれである。全長は13～14センチで、頭頂とうなじが茶色、白いほおに黒い斑のあるのがスズメの特徴である。

分布は広く、ヨーロッパ中部およびアジアでは北極圏から中国、日本、台湾、インド、マレーシア、ジャワにまでいる。

このスズメは、スペインスズメのように人家に近寄らないが、しかし、日本のようにイエスズメのいないところでは、人家のまわりを占領している。だから日本ではこのスズメが《家スズメ》なのである。そしておもしろいことに、北日本ではニュウナイスズメ *Passer rutilans* [(筆者注) 赤っぽいスズメの意；英名では russet sparrow] が、ヨーロッパでのイエスズメに対するスズメのように、人家に近寄らずに広葉樹林などで生活している。

同種のスズメが、地域によって、あるいは共存する他のスズメの種によって、人家近くに暮らしたり、人家にまったく近寄らずに暮らしたりするということは、非常に興味深い⁶⁾

スズメの専門家も①「日本にはスズメ類はスズメのほかにもう一種ニュウナイスズメが本州中部以北の山地や北海道の森林にすんでいるが、ヨーロッパでのスズメはちょうど日本のニュウナイスズメと同じような生活をしている。スズメほど他のスズメ類の存否によって洋の東西でこのように生態を大きく異にする鳥も珍しい」⁷⁾；②「スズメ属の鳥の多くは、人家周辺に生息する習性を

持っており、より優位の種がその環境を独占し、他のスズメ属の種を駆逐してしまうようである」⁸⁾と言う。ちなみに、ニュウナイスズメの「ニュウナイ」の語源とは何か、という質問をよく受けるが、これについて吉田金彦氏は次のように述べている。

『大言海』に「ニフナ^{にひなへ}イは新嘗の訛、新稲を人より先に食む意かと云う」とある。ニヒナへは、上代東国の方言で、『万葉集』東歌「誰そこの屋の戸押そぶる爾布奈^{にふなみ}未に我が背を遣りて齋^{いは}ふこの戸を」(三四六〇)とある。ニュウナイスズメは、未熟の稲の種子を好んで食べるので、妥当な説である。柳田国男は、ニュウ(ニフ)は頬の黒斑で「ニュウのない雀」の意(野鳥雑記)という。また『大和本草』付録に、罪を被って追放された中将藤原実方の霊がスズメと化して宮中に帰り、台盤所の飯をついばんだため「入内」の名がついたという説が俗説として紹介されている⁹⁾。

以上で我が国のスズメ、つまり《家スズメ》とニュウナイスズメは、一通り理解できた。残るは只一つ。学名・英名のみならず和名でも「イエスズメ」と呼ばれている正真正銘の、外国産《家スズメ》である。この鳥について専門学者の解説を見てみよう。

2

イエスズメ (house sparrow || *Passer domesticus*)

スズメ目ハタオリドリ科の鳥。全長約 16 cm でスズメより少し大きい。雄はスズメに似ているが頭頂が灰色、のどの黒斑はスズメより大きく上胸部まで広がる。雌は体全体が黄色みを帯びた褐色で、のどに黒斑がない。南ヨーロッパおよび地中海周辺地域から中央アジアのステップにかけて分布していたが、人の農耕生活と結びついて西ヨーロッパ一帯に広がり、19 世紀には東ヨーロッパへと広がった。東は現在アムール地方まですんでい

る。さらに移住者に伴って、南・北アメリカ、南アフリカ、オーストラリアへも広がった。人里と農耕と強く結びついた鳥で、日本のスズメと同じ場所を占めている。生活力はスズメより強く、スズメを押しつけて分布を拡大している。1夫1妻で、わりと固まって繁殖し、巣は建物の穴や樹洞につくり、またしばしばツタの中や、木の茂みの中へ球形の巣をつくる。

1腹の卵は2～7個。繁殖期には昆虫や幼虫類をよくとるが、冬は農耕地に群れをつくって過ごし、おもに種子や穀物を食べている¹⁰⁾

このイエスズメが、英米人が普段「sparrow」と呼んでいるスズメである。したがって、「もし我々がsparrowという語によって日本の雀と同じような小鳥を頭に描いたとするならばそれは誤りで、当然このhouse sparrow——日本の雀より約1cm大きい、そして色彩がかなり違っている——を念頭に置かねばならない¹¹⁾」という指摘は至極尤もである。と見てくれば、《日本のスズメ》と《英・米のスズメ》の違いは一応明らかになった。

次に注目すべきことは、「(イエスズメは)移住者に伴って、南・北アメリカ、南アフリカ、オーストラリアへも広がった」という指摘である。つまり、北アメリカのイエスズメは、ヨーロッパからの移住者によって持ち込まれた外来種なのである。この秘話について知る人は意外に少ないので、ここで手元にある関連文献を幾つか紹介したい。

① 『朝日＝ラールス世界動物百科(鳥類)』

1850年、イエスズメは北アメリカに持ちこまれて放された。それまでイエスズメのいなかったアメリカに、ヨーロッパから移ってきた人たちが、故郷の鳥をなつかしがつて放したもので、最初はイエスズメが巣をつくりやすいように、その場所までこしらえてやっていた。

しかし、すみ場所と食料の条件が好適だったために、イエスズメは北アメリカ全土にひろがってしまった。アメリカに持ちこまれてからわずか

25年もたたないうちに、農業にとっての害鳥としてやっかいものの扱いされだした。このほかに、南アメリカ、南アフリカ、東オーストラリア、ニュージーランド、ハワイなどにも持ちこまれ、すみついている¹²⁾

② 井上義昌『英米風物資料辞典』

特にヨーロッパ・アジアのいえずめ (house-sparrow) が、アメリカに移入されて、これをアメリカでは English sparrow という。昆虫のうち有害なもの (insect pests), 特に毛虫 (caterpillar) の一種を駆除するのに一役買わせるために1850年ごろアメリカにもたらされた。他の鳥をいじめる (bullying) 性質があるし、これらを駆逐する傾向があったため English sparrow は、それ自体も害をなすものとみなされることが多く今日に至っている。またこの種のすずめは穀物・豆類・果実などを広く常食とする (extensive feeding) ののできられる (detested)。アメリカ及びカナダの全国に広がり、体長7インチ (17.5センチ), 雄は黒いのどと、その連れ合い (mate) よりもくすんだ茶色の羽毛 (more dusky-brown plumage) をしている。頭と上半身はくり色 (chestnut), 翼は白のしま模様 (banded with white), ほぼ白く黒点があり, 下半身は灰白色 (greyish-white) である¹³⁾

③ 大田眞也『スズメ百態面白帳』

北アメリカには元々スズメもイエスズメもいなかったが、後で人為的に持ち込まれた。イエスズメは、イングリッシュ・スパロウとかヨーロッパアン・スパロウともよばれるように、最初一八五〇年にイギリス産^{つがい}八番がニレの木の毛虫駆除のためにボストンとニューヨークのブルックリンに放たれた。しかし、これは定着が確認されなかった。そこで再び一八五三年にイギリス産約一〇〇羽がニューヨークのセントラルパークとその近くのグリーンウッドに放たれたところ、これらはうまく定着して繁栄し始めた。

その後もボストン、ニューヘブーン、ポートランドなど北アメリカ各地に

二〇年間にわたって一五〇〇羽が放たれ、各地で繁栄し始めた。一八六五年にはカナダで、一九〇五年にはメキシコでも確認され、わずか一世紀足らずの間に北アメリカ全土に分布を広げ、農作物の害鳥といわれるまでに殖えた……。

一方、スズメも一八七〇年にドイツ産一二羽がルイジアナ州に放たれ、一八七九年にはミズーリ州セントルイスにも放たれて一時は定着していたが、その後イエスズメが分布を拡大して侵入してくると姿を消してしまった。

このようにヨーロッパでも新天地の北アメリカでも体が大きく体力に勝るイエスズメ（全長一六・五センチ、体重二八・六グラム）がスズメ（全長一四・五センチ、体重二五・三グラム）を圧倒している¹⁴⁾。

④ *National Audubon Society: Field Guide to North American Birds (Eastern Region)*

Wherever this species occurs it is intimately associated with man, as its scientific name *domesticus* suggests. The entire North American population is descended from a few birds released in New York City's Central Park in 1850.¹⁵⁾

（このイエスズメが生息する場所は何処であろうと、その学名の「家」が示すように、人間と密接に結び付く。北アメリカに生息しているイエスズメは全て、1850年ニューヨーク市のセントラルパークに放たれた数羽の鳥から生まれたものである。）

⑤ 唐沢孝一『スズメのお宿は街のなか：都市鳥の適応戦略』

ヨーロッパに進出したイエスズメは、移民の人々の望郷の念に駆られて世界各地に導入された。北米大陸へは、一八五〇年にニューヨークに八^{つがい}番（これは失敗）、五一年に五〇羽の導入に成功、その後も各地に持ち込まれ、二〇世紀の初めには合衆国の全域に分布が広がった。南米へは一八七

二年にブエノスアイレスに導入されたのをはじめとして、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、チリなどに広がった。オーストラリア、ニュージーランドへは一八六〇年以降に大規模な導入がなされている。¹⁶⁾

このイエスズメの移入について、アメリカ人の鳥類学者でさえ“A few pairs of House Sparrows and of Starlings were unwisely introduced into the New York area from Europe about the turn of the century.”¹⁷⁾（浅はかなことに、数羽のイエスズメとムクドリが、世紀の変わり目頃にヨーロッパからニューヨークに移入された）と嘆いている。このイエスズメと同様の酷い扱いを受けたのが、日本産のクズ（葛）である。クズは1876年、日本人によって北アメリカに持ち込まれ、「土壌保全」に役立つ植物として、一時は政府による奨励金付きの大歓迎を受けながら、今では一転して「南部を食い荒らした植物（“the plant that ate the South”）¹⁸⁾」と厄介者扱いされる始末。誠に人間とは得手勝手なものである。ちなみに、イエスズメの移入年については、「北アメリカ（1852年に輸入）」¹⁹⁾とする説もあるが、どうも「1850年」が正しいようである。

3

ここで、スズメ（sparrow）の語源について見てみよう。古今東西人間に一番身近な鳥である以上、触れないわけにはいくまい。最初に、和名のスズメについて。『古事記』、^{あめのわか ひ こ}天若日子の葬送の場面に「雀為^{うすめ}碓女」とある。和名のスズメは、この^{うすめ}「碓女」に由来する²⁰⁾という説や、また「スズメという和名は、もとスズミ（須々美）といった。鳥の習性がくおどり、すすみ行くので、そう呼ばれた（『日本釈名』）」²¹⁾という説もある。柳田国男は「文献に現れたスズメという語とても、はたして最初から今のスズメを意味していたかどうか、まだ必ずしも確実ではない。これは雀という漢字もまた同様である。スズメを広く小鳥の意味に使った痕跡は、気を付けて見ると方々に残っている」²²⁾と指摘している。スズメの詳しい語源については、吉

田金彦編『語源辞典：動物編』に次のような説明がある。

スズは鳴き声（大言海・古語大辞典・柳田国男・音幻論など）、メはムレ（群）の約，ないし小鳥を表す接尾語メという説が一般的である。ただ，スズはササに通じ小の意かという異説（東雅・大言海）があるのは，スズメが小鳥の総称として一般化したために，そこから逆分析をしてササ（小）を考えたものである。漢字「雀」は呉音サク，漢音シャクで濁音ジャクは日本の慣用音。「少」と「隹」と合字で「小さい鳥」の意で表す。なお「孔雀」や古代の霊鳥「朱雀」の「雀」には，スズメの意味はない²³⁾

では次に，英語の *sparrow* の語源について。『ジーニアス英和大辞典』には「〔初 12 c 以前；古英語 *spearwa*（スズメ）〕²⁴⁾とあり，北方ゲルマン語系でスズメを指す言葉に由来するようである。荒俣宏氏も「英名は，デンマーク語など北欧語系でスズメを指す語を祖とする」²⁵⁾と指摘する。念のために，C. T. Onions の *The Oxford Dictionary of English Etymology* を見てみると，やはりスズメの語源は北方ゲルマン語系の古語から来たようである。

Sparrow = small bird of the family Fringillidae. OE. *spearwa* = OHG. *sparo*, MHG. *sparwe*, ON. *sporr*, Goth. *sparwa*²⁶⁾

では，スズメにまつわる西洋人の一般的イメージ・シンボルとして，どのようなものがあるか。アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』によれば，その大枠は次の6つ：①「愛情，好色を表し，アフロディテに捧げられる」；②「海と関連がある」；③「卑下，価値の低いものを表す」；④「喧嘩好き，大胆さ，用心，おしゃべりを表す」；⑤「キリストを表す」；⑥「悪魔を表す」²⁷⁾となろうか。また J. C. ケーパーの『世界シンボル辞典』は，スズメの項で「【キリスト教】雀は，卑賤，とるにたりないもの，の象徴〔「詩編」84：3，

「マタイ福音書」10：29〕。また、淫猥，好色，をあらわす〔プリニウス『博物誌』10：29〕。【ギリシア】雀は女神アプロディテの持ち物。【日本】雀「舌切り雀」は忠誠，報恩の象徴²⁸⁾と述べている。これで西洋に於けるスズメ像は，おおよそ把握できよう。

4

これまで見てきた点を踏まえた上で，スズメが『聖書』，ギリシア・ローマ神話，『イソップ寓話』，民間伝承，文芸の世界で如何なる役を演じているか，具体的に見てみたい。スズメは何処の誰が見ても「人間に一番身近な鳥」である。それだけに，八面六臂^{はちめんろっぴ}の活躍をしているに違いない。最初に，『聖書』から。『新約聖書』の中でスズメに言及したものに，「マタイ」(10：29-31)と「ルカ」(12：6-7)がある。両者の表現内容が似通っている故に，重複を避け「マタイ」のみを取り上げる。キリストは弟子たちに言う。

Are not two sparrows sold for a farthing? and one of them shall not fall on the ground without your Father. / But the very hairs of your head are all numbered. / Fear ye not therefore, ye are of more value than many sparrows.²⁹⁾

「二羽のすずめは一アサリオンで売られているではないか。しかもあなたがたの父の許しがなければ，その一羽も地に落ちることはない。／またあなたがたの頭の毛までも，みな数えられている。／それだから，恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも，まさった者である」³⁰⁾

一読して自明のごとく，スズメの「イメージ・シンボル」は「卑賤」，「価値の低いもの」である。しかし，キリストの言わんとする所は，ここにはあるまい。というのも，スズメは——いかに「価値の低いもの」ではあっても——神に守られたもの，つまり「あなたがたの父の許しがなければ，その1羽も地に落ちることはない」からである。「山上の垂訓」を引き合いに出すまでもな

く、天・地の間で価値が逆転するのが信仰の世界である。それが証拠に、「天国ではだれがいちばん偉いのですか」と問う弟子たちに対して、キリストは次のように答えている：「この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばんえらいのである」（「マタイ」18：4）。ここでキリスト者の意見を聞いてみたい。ミルワード氏は次のように述べている。

キリストが空飛ぶ鳥のおびたしい中から、特にスズメを名指しで語っている……スズメは、二束三文どころか二羽一文で売られているけれども、そのスズメさえ、たとえ一羽たりとも、天なる父の許しなくして地に落ちることはない……なるほどスズメは取るに足りぬものかもしれない。けれどもスズメは、それにもかかわらず、やはり地上になくってはならぬものであり、地球上いないところのないものでもある。そして人間もまた、やはり取るにも足りぬものであるかもしれないけれども、それにもかかわらず——というより、むしろそのためにこそ、神の創造のわざのうちにあって、なくてはならぬ存在なのである³¹⁾

では次に、『旧約聖書』を見てみよう。スズメに言及しているのは、「詩編」の2箇所のみ。最初に、「詩編」（84：3）を見てみる。

Yea, the sparrow hath found an house, and the swallow a nest for herself,
where she may lay her young, even thine altars, O LORD of hosts, my King,
and my God.

「すずめがすみかを得、つばめがそのひなをいれる巢を得るように、万軍の主、わが王、わが神よ、あなたの祭壇のかたわらに、わがすまいを得させてください。」

ここでは、スズメに対するイメージは、「価値の低いもの」と〈羨望の対象〉

というアンビバレントなものである。つまり「(もっとも卑しい)スズメ」³²⁾が、神の祭壇の傍らに住処を得ているからである。「詩編の作者が、神の住居の庭を魂も絶えいるばかりに慕い求めて、その庭先に巣を作るスズメをうらやんでいる」³³⁾というミルワード氏の指摘は、その証左である。

なお、この箇所に関して『聖書動物大事典』の著者、ウイリアム・スミスは、「英国のスズメ *Passer montanus*, L. も、やはり非常に多く、オリーブ山で数多く見ることができ(る)……詩編 84:3 [4] にくあなたの祭壇に、鳥は住みかを作り」とあるのは、まさにこの種に違いない」³⁴⁾と断定している。では次に、「詩編」(102:7)を見てみよう。

I watch, and am as a sparrow alone upon the house top.

「わたしは眠らずに屋根にひとりいるすずめのです。」

この箇所を根拠にアト・ド・フリースは、(スズメ＝「キリストを表す」)と定義している。だが『旧約聖書』によれば、「詩編」第102篇は「苦しむ者が思いくずれて、その嘆きを主のみ前に注ぎ出す時の祈^{いのり}」という。しかも『新約聖書』には、同様の表現は見当たらない。だとすると、〈わたし＝キリスト〉と断定するのは少々無理がある、と思うのであるが、いかがなものであろうか。

更に言えば、スズメは「喧嘩好き、おしゃべり」でく騒々しく群れる習性の鳥³⁵⁾である。これは古今東西、天下周知の事実である。なのに「眠らずに屋根にひとりいるすずめ」とは、どうも不自然である。この疑念を解消してくれるのが、『聖書動物大事典』を著したウイリアム・スミスによる次の解説である。

(この) 詩編で述べられている鳥はイソヒヨドリ *Petrocosyphus cyaneus*, Boie [*Monticola solitarius* (L.)] ではないかと思われる。これは、暗青色の装いと、もの悲しい単調な鳴き声をしているので、人々の注意を引かず

におかない目立つ種である。イソヒヨドリはユダヤ人の村落で、家屋、とくに離れ家の上にとまっているところがよく見られる。イソヒヨドリは群れをつくることはせず単独で生活し、稀に、つがい、または3羽以上でいっしょに行動するのが見られる。詩編の描写は、群れをなして騒々しくさえずるイエスズメやスズメには当てはまらない³⁶⁾。

このように、『聖書』に登場する動物名の混乱が生じるのは、「聖書の歴史は、異なる言語と数多くの宗教組織によって作られてきた、『翻訳の歴史』そのもの」³⁷⁾だからである。さて、「詩編」(102:7)の「スズメ」の正体が「イソヒヨドリ」と判明した以上、この《偽スズメ》について、もはや何も言及する必要もあるまい。

5

では舞台を移して、ギリシア・ローマ神話に登場するスズメについて見てみよう。この鳥は『聖書』の世界では、「二羽一文」で売られていた「取るに足りないもの」であった。だがヘレニズムの世界では、その評価は一転して、畏れ多くも「美と愛の女神」、アフロディテ（ローマ神話ではウェヌス、英語ではビーナス）の聖鳥とくる。これは、どう考えても合点が行かない。アフロディテは、言わずと知れた絶世の美女、しかも神である。どうして、このような取り合わせが生じたのであろうか。まさか、この女神とその夫、つまり神々の中で最も醜いヘパイストスとのアンバランスに合わせて、数ある鳥の中で敢えてスズメを起用したわけではあるまい。では何故か？

この謎を解く鍵が、スズメにまつわる「イメージ・シンボル」にある。前出のアト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』が「スズメ」の項で筆頭に挙げているのは、「愛情、好色」、ずばり言えば「性愛」、「淫猥」である。このスズメを「持ち物」とするのが「美と愛の女神」、アフロディテである。この「愛」とは、言うまでもなく「性愛」のことである。この「愛」の女神がダ

フネに対して息子のキューピッド（ギリシア神話ではエロス）を使って非情な報復をしたのは、乙女が「性愛」に背を向け、生涯貞節を守る誓いを立てたからである。また自ら制作した娘の石像と結婚したいと願ったピグマリオンの祈りを快く聞き届けたのは、それが「性愛」に直結するからである。

と見てくれば、スズメとアフロディテとの結び付きは無理なく納得できる。更に言えば、スズメが「海と関連がある」とアト・ド・フリースが指摘しているのは、アフロディテが「海」で生まれたからであろう。この「海と関連がある」が「愛情、好色」に次いで2番目に挙げられているのは、「愛」の女神の誕生譚が「性愛」や「男根」と不可分に連関している点を見れば、素直に首肯できる。

では「好色・性愛」の観点から、今一度スズメとアフロディテの「イメージ・シンボル」について具体的に見てみよう。最初に、スズメから。大田眞也氏は、スズメの色事について「交尾は、足場が安定した棟瓦やテレビのアンテナの上など目立つ場所で白昼堂々で行われ、雄のヒヨヒヨ鳴きも小さいがよく聞こえるので周辺の野次馬が集まって来て、妨害されることがある」³⁸⁾と述べている。更に詳しい解説については、この鳥に精通した作家、小林清之助氏の『鳥の歳時記』に次のような記述がある。

「鳥交わる」という季語は主としてスズメのことだろうと思う。というのは、ほかの野鳥の交わりは、あまり人の目にふれることがないが、スズメは屋根の上で堂々(?)とやるので、ちょっと注意していれば、じきに見られるからである。

「ピョロ、ピョロ、ピョロと、スズメがやさしい声をして鳴くのは、あれはどういう意味ですか」とある御婦人にきかれて、私は頭をかいたのだが、この方は、声だけ聞いて、動作を見られなかったのだろうか。そのピョロ、ピョロは、交わりの前に、雄スズメが雌を追ってささやく睦言の如きものなのである……そういう声を、屋根の上あたりで聞いたら、探し

てみられるといい。二羽のスズメが、チョン、チョン追いかけてっこをしているのが目につくだろう。そうして、雄が適当な頃合いを見はからい、立ちどまった雌の上にヒョイととび乗る。とび乗ったと思うと、たちまちおりる……これが五、六回から十回くらいくりかえされる。(このときの観察を、私のスズメの著書で読まれた方が、自分は十八回戦を、自分の友人で米軍のガードをしている男は四十八回戦を見たと報告してきた。十八回というのはありそうだが、四十八回というのは信じ難い。)³⁹⁾

もうこれでスズメについては十分であるまいか。次に、アフロディテについて見てみよう。この「愛」の女神が「性愛」の女神であることは、オウィディウスの『変身物語』にある次の語句：「ウェヌスの快樂（情交）」⁴⁰⁾「ウェヌスの情熱（愛欲）」⁴¹⁾「ウェヌスの喜び」⁴²⁾を見ても一目瞭然である。カール・ケレーニイの『ギリシア神話：神々の時代』に「アプロディーテーという言葉は、わがギリシア語で〈愛の享受〉の意味がある」⁴³⁾とある。この「愛の享受」の女神に関して、矢代幸雄氏は「キプロス島こそギリシアのアフロディテ、即ちヴィナス女神の信仰が発生した最も重要な土地なるを思えば、ヴィナスの原型が、東方出身のイシュタル——アシュタルテの強暴なる性の力を象徴した女神の系列に属するは明瞭である」⁴⁴⁾と言う。

ここまで見てくれば、〈アフロディテ＝性愛の女神〉についても十分と思われるが、更に今一つの証拠がある。それは、ロバート・グレーヴスの言葉：「彼女（アフロディテ）がそとを歩くときに鳩と雀をとまなっている」⁴⁵⁾にある。つまり、アフロディテの聖鳥はスズメとハトの2種、と言うのである。スズメとアフロディテとの結び付きについては既に例証した。残るは、ハトである。この鳥がどうして「性愛の女神」に繋がるのか。この点について探ってみたい。

アト・ド・フリースは、ハトの有する「イメージ・シンボル」の一つとして、「豊饒および愛 Love が最初に産み出したもの」⁴⁶⁾と明記している。これは、この鳥と「エロス」との密接な繋がりを示すものである。更に言えば、ハトの一

大特色は、鳥類の中では群を抜く旺盛な繁殖力にある。この点について『朝日＝ラールス世界動物百科（鳥類）』は、「ハトは1年に数回営巢するものが多い」上に、「繁殖期が季節的に限られている他の鳥と違い、自らの^{そのう}嚙嚢から出る《ハトの乳》でひなを養えるので、あまり季節に左右されずに繁殖のやり直しができる」⁴⁷⁾と言う。また『イソップ寓話』は、「ハトとカラス」という小話の中でハトの旺盛な繁殖力に触れ、それを揶揄の対象としている。というのは、ハトが子供の多さを自慢した時、カラスによって「家族が多いほど、悩みの種も多い（“The larger the number of your family, the greater your cause of sorrow.”）⁴⁸⁾」、とやりこめられているからである。これで『ギリシア・ローマ神話』の《スズメ段》はお仕舞いにして、『イソップ寓話』に移りたい。

6

『イソップ寓話』の中でスズメが主役で登場する物語と言えば、次の2話：「ウサギとスズメ」と「スズメとギンバイカの木の実」がある。順に見てみよう。

① The Hare and the Sparrow

A HARE pounced upon by an eagle sobbed very much and uttered cries like a child. A Sparrow upbraided her and said, “Where now is thy remarkable swiftness of foot? Why were your feet so slow?” While the Sparrow was thus speaking, a hawk suddenly seized him and killed him. The Hare was comforted in her death, and expiring said, “Ah! you who so lately, when you supposed yourself safe, exulted over my calamity, have now reason to deplore a similar misfortune.”⁴⁹⁾

（ワシに捕らえられたウサギが、涙をポタポタ流しながら、子供のよう
に泣きじゃくった。その姿をスズメが見て、憎まれ口をたたいた。「お前
さんの素晴らしい早足は一体どこへ消えたのだい」。「どうして、そんなに
のろまになったのさ」。スズメがこのように悪態をついていると、突然タ

カがスズメを引っ捕らえて、殺してしまった。胸のつかえが下りたウサギは、いまわきわの際に言った。「ごまをみろ！ 自分だけは安全だと思って、私の災難に小躍りしていたのに、そのすぐ後で自分が同じ目にあうとはさ」。

② The Sparrow and The Myrtle berries

A sparrow was feeding on some myrtle berries. The berries were so sweet that the sparrow stayed right there in the tree and refused to leave. Meanwhile, a bird catcher who had been watching the sparrow caught her and killed her. As the sparrow was about to take her last breath, she exclaimed, "What a miserable creature I am! I am going to die merely for the sake of some food and its momentary sweetness."

This fable shows that some people, out of their desire for good food and luxury, put their lives at risk in the same way as wicked people do.⁵⁰⁾

(スズメが、ギンバイカの木の実をついばんで食べていた。その実はとても旨かったので、食べるのに夢中で、木の実のそばを決して離れようとはしなかった。その様子をじっと見張っていた鳥捕りが、スズメを捕らえて、殺してしまった。息を引き取る間に、スズメは言った。「なんて惨めなことか。旨い食べ物に束の間目が眩んだというだけで、命まで落とす羽目になるとは」。

この寓話が与える教訓とは《世の中には美味しいものを食べて、贅沢もしたい、という欲に目が眩んで、悪人どもと同じように自分の命を危険にさらす者も居るのだ》ということである。

ここで描かれているスズメの姿は、①<他人の不幸に欣喜雀躍する冷血漢>;②<夢中になって食い物を漁る強欲者>、と完膚なきまでに酷評されている。ここには、ギリシア・ローマ神話で見た「聖鳥」の面影など微塵もない。それどころか、寓話のスズメは、いずれも最後はタカや人間によって無情に殺

されてしまう始末である。それというのも、スズメが古今東西、人間、とりわけ農民には〈殺しても、殺し足りない不倶戴天ふぐたいてんの敵〉と見なされてきたからであろう。中川芳太郎氏の文献調査によれば、ある西洋の鳥類学者は、スズメ（イエスズメ）を“pest”⁵¹⁾と呼び、この鳥のイメージは「noisy, quarrelsome, and vicious... cunning, crafty, hardy, and omnivorous（騒々しく喧嘩好きで性質不良、ずるく奸智に長け頑強にして何でも食べる）」⁵²⁾と散々である。アト・ド・フリースがスズメの「イメージ・シンボル」の一つに、「悪魔」を入れているのも宜なるかなである。

この〈スズメ憎し〉の思いを色濃く反映しているのが、英国の伝承童話、「マザーグース」にある「誰がロビンを殺したの（‘Who killed Cock Robin?’）」である。下手人は、“Who killed Cock Robin ?/I, said the Sparrow,/With my bow and arrow,/I killed Cock Robin.”⁵³⁾に明らかなように、スズメである。ここで《英国でロビンと言え、如何なる鳥なのか》を見てみれば、スズメの「悪魔」振りは一目瞭然である。というのも、ロビンは英国では別格の鳥、つまり「最も英国的な（鳥）」⁵⁴⁾と賛美され、国を象徴する「国鳥」に選定されるほど、国民の間で圧倒的人気を有するアイドル・スターだからである。だから、「巢を取ることにかけては最も無情な村の腕白坊主でさえ、ロビンにだけは手をつけない⁵⁵⁾（“even the most thorough-paced nest-takers among the village children are accustomed to spare the robin.”）⁵⁶⁾」、と博物学者の W.H. ハドソンも述べている。この国家・国民のアイドル・スターを殺害したのがスズメだ、と「マザーグース」は言うのである。と見てくれば、スズメが「悪魔」と見なされたとしても致し方のないことである。

このスズメにまつわる負のイメージを現代人に鮮明に浮き彫りにするもの、それが今一つの人間に身近な野鳥、ツバメとの比較・対照である。周知のように、両者は、いずれも人家に営巣する鳥である。にもかかわらず、その評価となると、〈スズメ＝「イネを食い荒らす害鳥」；〈ツバメ＝「イネの害虫を駆除してくれる益鳥」⁵⁷⁾〉と正反対である。かつて筆者は両者を比較して、エッセ

イ風に次のように書いた。

スズメは生まれつきの顔黒で歌声も話にならず、さりとて高い美空でかけ翔り舞うこともない。年から年中、見栄えのしない一いっしょう張羅を身に纏まとう「着た切り雀」。どっぷりと人間世界に依存しながら、人には断じて気を許さず、しかも逃げる姿は毎度変わらず見るも滑稽な狼狽ぶり。〈およそ美や気品などとは無縁の憎たらしい害鳥〉、と一般には見なされている。

一方、ツバメは夏の盛りですら、一分の隙もない黒い燕尾服に身を固め、飛翔で見せる身のこなしも実に優美にして気品すらある。加えて、水田の稲穂がたわわに実る頃、米などには見向きもしないで、数千、数万の群れをなして去っていく。その分スズメが憎まれる。稲作を中心としてきた日本では、ツバメは害虫を駆除する益鳥として良い時期に渡ってくるが、去り際もまた見事である。

ここで終われば、〈スズメ＝「悪魔」の害鳥〉と一方的に断罪した結果となり、スズメに対して公平を欠くは必定。というのも、「スズメ (sparrow) は日ごろ、たくさんの害虫をとって食べる益鳥」^[58]でもあるからである。『朝日＝ラールス世界動物百科 (鳥類)』は次のように述べている：「スズメ類に対する人間側の評価はまちまちである。コムギの倉庫を荒らしたり、穀物畑や果樹園に損害を与える害鳥だと見る見方もあるが、一方では、害虫を大量にとつてくれる益鳥であるともいえる」^[59] 〈これでは間ま怠だるっこい。一体スズメは最終的には害鳥なのか、それとも益鳥なのか〉、と問う人が居るが、その答えは小林清之助氏の下記の文を見れば明らかである。

これは中国での話だが、この国では、かつてスズメを四害（ネズミ、スズメ、ハエ、カ）の一つに数え、国民運動の一環として盛んに狩りとした。スズメ捕り突撃隊というのが二千四百余隊も編成され、四季の別なく

スズメ退治を行った……その後、中国側の都合で急に中止された。スズメは農作物の害虫を補食する功が大であることがわかったため、今後益鳥と見做す——というようなことがその理由であったが、当時ひどい凶作に見舞われたことから、考えを改めたのだろう。この法令は三十五年四月に出され、スズメは四害からはずされて、そのあとへはナンキンムシが入れられた⁶⁰⁾。

これで『イソップ寓話』に登場するスズメの話はお仕舞いにして、英文学の世界に舞台を変えたい。

7

では、英文学の主要舞台に登場するスズメの「イメージ・シンボル」について時代順に見てみよう。最初に、チョーサーから。『カンタベリー物語』の「プロローグ」(626行)。語り手は、カンタベリー寺院に詣でる巡礼の一团と出会い、その一人を評して言う：「すずめのように好色，淫奔⁶¹⁾ (“As hoot he was, and lecherous, as a sparwe”⁶²⁾ [“As hot he was and lecherous as a sparrow”])」。文字通り〈スズメ＝好色，淫猥〉を示すものであり、このイメージがスズメにまつわる筆頭であることは既に見た。

では次に、シェイクスピアを見てみる。煩わしいことに、この天才は多くの箇所で見出しの hedge や house を付けずに、単に sparrow と呼んでいる。したがって、『リア王』(1幕4場)のように、明らかに「ヨーロッパカヤクグリ (hedge sparrow)」と分かる箇所は除外して、「イエスズメ (house sparrow)」が登場する主な箇所を取り上げることとする。

- ① 『尺には尺を (*Measure for Measure*)』(3幕2場)。放埒者のルーシオは、堅物のアンジェロを酷評して次のように言う：「雀が軒先に巣を作ってもいけないっていうんだからね、雀はあのほうが好きだからって⁶³⁾ (“sparrows

must not build in his house-eaves, because they are lecherous.”)」。これも文字通り〈スズメ＝好色，淫猥〉を示すものである。

- ② 『マクベス (*Macbeth*)』(1幕2場)。大合戦の後で、王から自軍の将軍の様子を尋ねられ、隊長は答える：「雀には鷲，兎には獅子は懼れませぬ⁶⁴⁾ (“As sparrows eagles, or the hare the lion.”)」。これは〈スズメ＝価値の低いもの，取るに足りないもの〉を示す。

- ③ 『トロイラスとクレシダ (*Troilus and Cressida*)』(2幕1場)。道化役のサーサイティーズは憎い将軍エージャックスを酷評して言う：「雀なら九羽一銭で買うが，あいつの脳みそなら一羽の九分の一でもお断わりだ⁶⁵⁾ (“I will buy nine sparrows for a penny, and his pia mater is not worth the ninth part of a sparrow.”)」。これは上の②と同様，〈スズメ＝価値の低いもの，取るに足りないもの〉を示すが、『聖書』を踏まえた台詞であるのは明白である。

- ④ 『ヘンリー四世 第一部 (*Henry IV part 1*)』(2幕4場)。道化のフォルスタッフとウエールズの王子の対話にスズメが登場する。ここではスズメは，人間によって撃ち殺される価値しかない。

Prince of Wales

He that rides at high speed, and with his pistol kills a sparrow flying.

Falstaff

You have hit it.

Prince of Wales

So did he never the sparrow.

「王子」

そう，全速力で馬を飛ばせながら，飛んでいる雀をピストルで射ち落とすという――

フォルスタッフ

そうだ、図星，大当たり！

王子

ところが、かんじんの雀のほうは、かいもく落ちないってなァ。』^[66]

- ⑤ 『ハムレット (*Hamlet*)』(5幕2場)。剣術試合に臨む直前、友人のホレイショウに対してハムレットは言う：「一羽の雀が落ちるにも神の配慮^{はいりょ}がある^[67] (“there’s a special providence in the fall of a sparrow.”)」。これも『聖書』を踏まえた台詞である。

- ⑥ 『お気に召すまま (*As you like it*)』(2幕3場)。昔の主人の忘れ形見に自分の有り金を全て差し出しながら、忠義な老人は言う：「どうか、これを取って下さいまし。からすにも食べ物を与え、／いえ、雀にも、お心によって、食べ物をお与えになる神様よ、／どうかわたしの老後をお慰めくださいまし！^[68] (“Take that, and He that doth the ravens feed,／Yea, providently caters for the sparrow,／Be comfort to my age !”)」。『詩篇』(147:9)に「食物を獣に与え、また鳴く小がらすにあたえられる」という一文があるが、上の台詞は、これを踏まえたものであるのは見ての通りである。これでシェイクスピアはお仕舞いにして、詩人に移りたい。

8

これまで見てきたように、スズメに対する西洋人のイメージ・シンボルは「好色・淫猥」, 「取るに足りないもの・価値の低いもの」, 「悪魔」と見るも無惨なせいか、どうも文人たちはスズメなどには見向きもしないようである。研究社の『英語歳時記』にも、スズメは「ロマン派のうたう鳥のなかにも少ないようである」^[69]とある。ところが、ここにスズメを詩材に取り上げる奇特新詩人が居る。マッシュュー・グリーン (Matthew Green [1696-1737]), ウィリアム・

ブレイク (William Blake [1757-1827]), それにロマン派の大御所, 桂冠詩人のワーズワースである。順に見てみよう。

① 'The Sparrow and Diamond' by Matthew Green

I lately saw, what now I sing,
Fair Lucia's hand display'd ;
The finger grac'd a diamond ring,
On that sparrow play'd.

The feather'd play-thing she caressed,
She stroked its head and wings ;
And while it nestled on her breast,
She lisped the dearest things.

With chisell'd bill a spark ill-set
He loosened from the rest,
And swallowed down to grind his meat,
The easier to digest.

She seized his bill with wild affright,
Her diamond to descry :
'T was gone ! She sickened at the sight,
Moaning her bird would die.

The tongue-tied knocker none might use,
The curtains none undraw,
The footmen went without their shoes,
The street was laid with straw.

The doctor used his oily art
Of strong emetic kind,

Th' apothecary played his part,
And engineered behind.

When physic ceased to spend its store,
To bring away the stone,
Dicky, like people given o'er,
Picks up when let alone.

His eyes dispelled their sickly dews,
He pecked behind his wings,
Lucia, recovering at the news,
Relapses for the ring.

Meanwhile within her beauteous breast
Two different passions strove ;
When av'rice ended the contest,
And triumphed over love.

Poor, little, pretty, fluttering thing,
Thy pains the sex display,
Who only to repair a ring,
Could take thy life away.

Drive av'rice from your hearts, ye fair,
Monster of foulest mien :
Ye would not let it harbour there,
Could but its form be seen.

It made a virgin put on guile,
Truth's image break her word,
A Lucia's face forbear to smile,
A Venus kill her bird.

「今詠おうとすることは、奇麗なルチャの
手に起こったことで、つい先頃見たばかり。
ダイヤの指環で飾った指の
上で雀がたわむれていました。

その鳥^{おもちゃ}玩弄物に彼女は愛撫し、
頭や翼をなぜました。
雀が彼女の胸にうずくまると、
彼女はいとも愛らしいことをささやきました。

尖った^{はし}嘴^はで填め方のわるい宝石を
台から雀はとりはずし、
もっと消化をよくするために、
食物を^{くだ}砕こうと呑みこみました。

彼女はびっくり仰天し、ダイヤを
とり戻そうと嘴^{くちばし}を押さえました。
もう遅い！ 彼女はそれを見て気をもんで、
雀が死ぬと悲しみました。

^{ノッカー}訪問鈴の舌はしばられて誰も使おうとはしません。
窓掛は誰も開けようとはしません。
下男^{はだし}は跣でそつとあるき、
道には藁^{わら}を敷きました。

お医者強い嘔吐剤の
油で治療をしました。

薬剤師はお役目心得て、
陰で薬を調合しました。

その宝石をとりもどす、医術も
施すすべがなくなりました。
デッキイはほったらかされた人のように
ひとりになると元気づく。

目からは病いの露はれて、
雀は翼の裏をすすぐりました。
ルチアはそのことを聞いて元気になったが、
指環を思ってた^{しょげ}た情気しました。

とかくの間、彼女の美しい胸の中で
ふたつの烈しい感情が闘いました。
遂に欲心がその争いに結びをつけて、
愛の情にうち勝ちました。

哀れな、小さい可愛い鳥よ、
お前の苦痛が女の本性を暴露させ、
指環をもとのようにしたいばかりに、
お前の命をとろうとするのだ。

娘さん、心の中から「欲心」を追い払いなさい。
いちばん汚らしい顔のあの怪物を。
そ奴の姿をちらりと見たら、
心に棲まわすことのないように。

そ奴が^{おとめ}処女に変心させ、
 真理の権化に破約させ、
 ルチアの顔に笑うのを止めさせ、
 小町娘にその鳥殺させました。』⁷⁰⁾

② ‘The Happy Blossom’ in *The Songs of Innocence* by William Blake

Merry, merry sparrow !

Under leaves so green

A happy blossom

Sees you, swift as arrow,

Seek your cradle narrow,

Near my bosom.⁷¹⁾

「たのしい たのしい雀よ！

目にしみるほどの緑の葉の下で

しあわせな花が一つ

おまえを見ている 矢のように速く

せまい^{ゆりかご}揺籃を わたしの胸近く

さがすおまえを』⁷²⁾

③ ‘The Sparrow’s nest’ (1807) by William Wordsworth

Behold, within the leafy shade,

Those bright blue eggs together laid !

On me the chance-discovered sight

Gleamed like a vision of delight.

I started — seeming to espy

The home and sheltered bed,

The Sparrow’s dwelling, which, hard by

My Father’s house, in wet or dry

My sister Emmeline and I

Together visited.

She looked at it and seemed to fear it ;
Dreading, tho' wishing, to be near it :
Such heart was in her, being then
A little Prattler among men.
The Blessing of my later years
Was with me when a boy :
She gave me eyes, she gave me ears ;
And humble cares, and delicate fears ;
A heart, the fountain of sweet tears ;
And love and thought, and joy.⁷³⁾ (Composed in 1801)

「見よ、木の葉繁りて蔭なすところに
一緒にかためて置かれた、光る青い卵を！
偶然見つけたその光景が、わたしに向かって
喜びのまぼろしのよう輝いていた。
その雀の家と、葉で掩われた寢床を
見ようとしてわたしはびっくりした。
その雀の住居はお父さんの家のすぐそばに
あったので雨の日も晴れた日も
妹のエメリンとわたしは
一緒に見に行った。

妹はその巣を見て怖がるようだった。
そして近寄りたいと思いながらも恐がるようだった。
男ばかりの中のおしゃべりさんだったが、
そんな気持が妹の心の中にあっただの。
後年、わたしに有難いお授かりものとなった妹は、
少年の頃のわたしと一緒にいた。
その妹はわたしに、ものを見る目と、聞く耳とを与えてくれた――
さらに、つつまじやかな思いやり、敏感な恐怖心、

やさしい涙の源^{もと}なる心、
愛と思想と喜びをも。』⁷⁴⁾

①の詩：「雀とダイヤモンド」のスズメは、良く人に慣れた可愛い子飼いのスズメであり、飼い主は大層優しい乙女である。でも、いかに可愛くとも、所詮スズメはスズメ。乙女がくスズメをとるか、ダイヤモンドをとるか〉の二者択一を迫られると、結局「雀」は「ダイヤモンド」の魅力には勝てずに、哀れにも殺されてしまう始末。②の詩：「しあわせな花」は「たのしい、たのしい雀よ！」と謳われても、つまるところ「雀」は「花」の脇役に過ぎない。③の詩：「雀の巣」は、良く読めば何のことはない。詩人はスズメそのものを謳っているわけではなく、偶然見つけたスズメの巣に言寄せて、《我が熱愛の妹》を謳っているだけだ。スズメはここでも単なる脇役に過ぎない。では、何よりも鳥を愛する博物学者の目には、スズメはどのように映るのであろうか。

9

W.H.ハドソンの『鳥たちをめぐる冒険 (*Adventures among Birds*) [1913]』にスズメにまつわる次のような逸話がある。

He said that when he was a young man living in his home, a small hamlet near Wronxham Broad, a number of martins bred every year on his cottage. They thought a great deal of their martins and were proud to have them there, and every spring he used to put up a board over the door to prevent the entrance from being messed by the birds. One spring a pair of martins made their nest just above the door and had no sooner completed than a pair of sparrows stepped in and took possession and at once began to lay eggs. The martins made no fight at all, but did not go away ; they started making a fresh nest as close up as they could against the old one. The entrance to the new nest was made to look the same way as in the first, so that the back part was

build up against the front of the other. It was quickly made and when completed quite blocked up the entrance of the old nest. The sparrows had disappeared; he wondered why after taking a nest that didn't belong to them they had allowed themselves to be pushed out in this way. At the end of the season, after the departure of the martins, he got up to remove the board, and the double nest looked so curious he thought he would take this down too and examine it. On breaking the closed nest open he was astonished to find the hen sparrow in it, a feathered skeleton still sitting on four eggs.⁷⁵⁾

「(非常に年老いた土地の猟師が言うには) 彼がまだ若くて、ロクサム・ブロードに近い小村の家に住んでいたころ、家には毎年多数のイワツバメが巢をかけた。家族はツバメのことを大層こころにかけ、誇りとしていて、春になると扉の上に板をさしかけて、玄関が鳥たちのふんで汚されないようにしたものだった。ある年、一番のイワツバメが扉の真上に巢をつくった。そこへすかさずスズメの番が侵入してきて居すわってしまい、さっそく卵を産みはじめた。イワツバメは争おうともせず、かといって立ち去るわけでもなく、古い巢のすぐとなり新しい巢をつくりはじめた。新しい巢の入口は、古い巢と同じ方向を向き、背部は古巢の前面に向くようにつくられた。巢は敏速につくられ、仕上がったときには古巢の入口をすっかりふさいでしまった。スズメは姿を消した。いったんは他人の巢を横取りしながら、今度はなぜこれほどあっさりと追い出されてしまったのか不思議だった。季節の終りがきて、イワツバメが飛びたってしまったあとで、彼は板をはずしに上がった。あの二重の巢がいかにめずらしかったので、それもついでに取ってよく見ようと思った。そしてびったりくっついた巢を取り外してきたとき、かれはぎょっとした。そこには一羽の雌スズメが、羽の生えた骸骨となってお卵の上に座っていた。」⁷⁶⁾

一読して自明の通り、「鳥の詩人」と謳われたハドソンですらも相手がスズメとなると、褒める言葉も見つからないようである。それにしても、恐ろしい

話ではある。筆者もツバメの巣を横取りする横着スズメを間近で観察したことはあるが、このような恐ろしい復讐話は寡聞にして知らない。この暗い話で英文学は打ち切りにして、舞台を米文学の世界に移したい。

10

ヨーロッパの故国から新世界のアメリカへ、移民によって鳴り物入りで持ち込まれた外来種のスズメ。だが、その評価は四半世紀を経ずして逆転し、最終的にどんな扱いを受けたか。それについては既に見た。とすると、この国の文人たちの描くスズメの姿は「悪魔」の鳥か、それとも憎まれ役の悪役に過ぎないか。でも有り難いことに、例外の文人が居る。H.D. ソロー（1817-62）である。彼は『森の生活（*Walden, or Life in the Woods*）[1854]』の中でスズメを称えて次のように述べている。

① I once had a sparrow alight upon my shoulder for a moment while I was hoeing in a village garden, and I felt that I was more distinguished by that circumstance than I should have been by any epaulet I could have worn.⁷⁷⁾

「わたしは一ぺん村の菜園で除草をしていたとき、ちょっとのみ、雀に肩に停まりました。わたしはそのことによって、わたしの帯びることのできるどんな肩章によってよりも一層名誉をあたえられたような気がした。」⁷⁸⁾

② The first sparrow of spring ! The year beginning with younger hope than ever !⁷⁹⁾

「春の最初のスズメ！ 一年は前よりもさらに若い希望で始まるのだ！」⁸⁰⁾

ここでのスズメは、一に位階勲等にも勝る栄誉の鳥、二に希望と新生の「春告げ鳥」、と眩しい光のイメージ一色である。この賞賛は、文字通り素直に受け取って良いものだろうか。どうも気になる。これまで見てきたスズメの姿と

は違いが有り過ぎる。本当に、H.D. ソローが称えているのは、あの嫌われ者のイエスズメのことであろうか。どうもそうではなさそうである。

というのは、本の表題：『森の生活』と、その内容：「わたしはたちまち小鳥たちの隣人になったことを知ったのである。小鳥を籠にとじこめることによってではなく、わたし自身が小鳥たちのそばの籠にはいったのだ⁸¹⁾ ("I found myself suddenly neighbour to the birds ; not by having imprisoned one, but having caged myself near them.")⁸²⁾」を見れば自明のように、この時の H.D. ソローの生活空間は「森」であり、北アメリカでも森に住むのは〈イエスズメ〉ではなく、〈山林スズメ〉だからである。この2種のスズメは、いずれも移民によって海外から持ち込まれた外来種であるが、その評価となると対照的である。クールな鳥類学者でさえ両者の間に依怙臆的な一線を画して、次のように述べている。

House Sparrow

As so often happens, introduced species can become a problem, and the House Sparrow is no exception. Because they compete for food and nest sites, some native species have suffered. Although they consume insects and weeds seeds, they may do considerable damage to crops.⁸³⁾

(大層よくあることだが、外来種は問題を引き起こすことがある。イエスズメとて例外ではない。この鳥は食餌と営巣場所をめぐって他の鳥と争うために、在来種の中には被害を蒙る鳥もある。イエスズメは昆虫や雑草の種を退治してくれるとはいえ、農作物にはかなりの被害を与えているのではなかろうか。)

Tree Sparrow

This introduced species differs from its relative, the House Sparrow, in that the sexes are alike. It is much less aggressive and quarrelsome, and it is more gregarious, often assembling in larger flocks. Altogether, the Eurasian

Tree Sparrow is a more attractive bird, both in appearance and behavior. These birds sometimes visit grainfields and feed on corn, oats, and wheat, but they also consume many injurious weed seeds and, to a lesser extent, insects.⁸⁴⁾

(この外来種の山林スズメは、雌雄は同色同大、この点でイエスズメと異なる。イエスズメは攻撃的・喧嘩好きだが、山林スズメはそれ程ではない。でも、より集団性に富み、しばしば大きな群れをなして集まる。見た目や振る舞い等々、全体的に見ると、ユーラシアの山林スズメの方がイエスズメよりも魅力がある。山林スズメは時に穀物畑に現れ、トウモロコシ、カラス麦、小麦などを食べるけれども、しかし有害な雑草の種を数多く、それに次いで害虫をも退治してくれる。)

H.D. ソローを歓喜させ、彼に新生の希望を与えたのが山林スズメだとすると、それは我が国の《家スズメ》と同種の鳥である。どうもスズメは、古今東西、人間に近づけば近づくほど、疎まれ憎まれるようだ。では舞台を移して、最後に、東洋版、とりわけ我が国のスズメのイメージ・シンボルについて見てみよう。

11

大修館の『世界ことわざ大事典』や『ブルーワー英語故事成語大辞典』を紐解いても見ても、スズメにまつわる英米の故事や成語は何一つ見当たらない。ところが、我が国には中国由来のものを含めて結構ある。主なものを列举してみる。

- ① 「燕雀 ^{いずく}安んぞ ^{こうこく}鴻鵠の志を知らんや」 = 「[史記陳涉世家] 小さな鳥には大きな鳥の志はわからない。小人物は大人物の遠大な志を知ることができない。」⁸⁵⁾
- ② 「雀の涙」 = 「ごくわずかなもののたとえ」⁸⁶⁾

- ③ 「雀の角」＝「雀の頭に生えた角。雀のように弱小なものが、たとえ角の如き武器を持っても少しも恐ろしくないということ。また、恐れるに足りない武器のたとえ。」⁸⁷⁾
- ④ 「雀の巢も構うに溜る」＝「雀がわずかなものをくわえて運んでいても、ついには巢を作りあげるように、少しのものものもつもりつもれば多くなる。」⁸⁸⁾
- ⑤ 「雀の千声鶴の一声」＝「つまらぬ者の千言より、すぐれた人の一言がまさっている。」⁸⁹⁾
- ⑥ 「雀の鷹の巢に近付けるが如し」＝「弱小な者が恐れおののくさまのたとえ。」⁹⁰⁾
- ⑦ 「雀脅して鶴失う」＝「雀を追ひ払おうとして、鶴を逃がしてしまう。細かいことにこだわって全体をだめにしてしまうことをたとえていう。」⁹¹⁾
- ⑧ 「雀百まで踊り忘れず」＝「雀は死ぬまで飛びはねる癖が抜けないように、若い時に身についた習慣（特に道楽の類）は、年をとってもなおらないということ。」⁹²⁾
- ⑨ 「楽屋すずめ」＝「スズメは、餌を食べている時以外は四六時中、〈チュン、チュン〉と鳴いている。それは全くおしゃべりの人そっくりである。それで、芝居の楽屋などに出入りして、役者の裏話に詳しい人間をこう言う。」⁹³⁾
- ⑩ 「京雀」＝「京都に住みなれて市中の事情にくわしい人。京鳥。」⁹⁴⁾
- ⑪ 「雀の小躍り」＝「スズメはニワトリのように平たく歩かないで、時々、小きざみに飛び上がって動き回る。その様子が、まるで跳るようであるから、人間が喜び跳り上がるときに使う。」⁹⁵⁾
- ⑫ 「欣喜雀躍」＝「雀がおどるように、こおどりして喜ぶこと。」⁹⁶⁾
- ⑬ 「門前（門外）雀羅を張る」＝「[史記汲鄭伝、賛「門外可設雀羅」]訪ねる人がないので、門前は雀を捕える羅を張ることができるほど寂し

い。さびれていることのたとえ。』⁹⁷⁾

- ⑭ 「雀^{じゃく}角^{かく}鼠^そ牙^がの争い」＝「訴訟を起こすことをいう。スズメに角があるや否や、ネズミに牙があるかないかで、争論するからだ。』⁹⁸⁾

- ⑮ 「目^めを掩^{おほ}うて雀^{とら}を捕う」＝「後漢つまり紀元後二〇年ごろ、もう諺として成立していたという。スズメを逃がすまいというので、目をおおって捕まえようとする。つまらん小策を弄すること。』⁹⁹⁾

一読自明のごとく、これらの故事成語を通して浮かび上がるスズメの一大イメージ・シンボルは「卑賤，取るに足りないもの」に尽きる。「卑賤，取るに足りないもの」とは、換言すれば《弱者》のことである。唐沢孝一氏は「スズメの生活を見ていると，多くの民衆の声が聞こえてくる。弱者であることの哀しさ，悔しさ，生活の苦しさが聞こえてくる」¹⁰⁰⁾と言う。野草の「カラスノエンドウ」と「スズメノエンドウ」を見比べてみるがよい。雑草などに関心のない人ですらも，何故に「カラス」と「スズメ」が対比的に用いられているか明白に理解できよう。

さて，古今東西人間に身近な野鳥と言え，スズメ，ハト，カラスであるが，この3種の鳥の中でカラスは《最強》，スズメは《最弱》の鳥である。したがって，この両者を対比してみれば，改めて「弱者」としてのスズメがより一層鮮明となるであろう。唐沢孝一氏は両者を比較して次のように述べる。

カラスは人とともに都市生態系の頂点にたち，都市に君臨する捕食者の地位にあり，人類にとっても手強いライバルである。これに対してスズメは，目立たないが，しかし，着実に人々の生活の隅々にまで深く潜入し生息している。カラスが上空から都市を俯瞰するやや大型の鳥であるとすれば，スズメは人の生活の臭いを求めて都市の奥深くに潜り込み，常に底辺にあって上空を見上げる立場にある。都市の繁華街で残飯をあさり，繁殖期には多くの小鳥類の雛や卵を捕食する黒いカラス軍団は，あたかも権力

の座に座る支配者の地位にあるかのようなのだが、これに対し、スズメは弱者の立場を代弁する「民衆の鳥」といえよう¹⁰¹⁾

12

さて「弱者」と言えば、判官鼯鼠とくるが、これは我が国民の一大特質である。判官鼯鼠とは「不遇な者、弱い者に同情し肩を持つこと」¹⁰²⁾の意である。ここに「弱者の立場を代弁する〈民衆の鳥〉」、スズメを《弱者の友》として称え、謳う要因がある。我が国の童謡：「雀の学校」や昔話：「舌切り雀」は、その証左である。このようにスズメを《弱者の友》と見なす文化風土の中で生を受けた者が、長じてスズメと同様の「弱者であることの哀しさ、悔しさ、生活の苦しさ」を身に染みて体験した時、その人の謳うスズメ観は読者の心を捉えて離さぬものとなる。

そうした《スズメ文学》を代表する文人が小林一茶と北原白秋である。両者は共に「不遇な者、弱い者」として辛酸を嘗めた体験を有する。最初に、一茶(1763-1827)から見てみよう。その人生は「苦渋に満ちた過酷な生涯であった」¹⁰³⁾という言葉に尽きるが、要約すれば以下の如し。

信濃国(長野県)水内郡柏原村の農家の長男として生まれる。3歳の時に生母を失う。8歳で継母を迎えるも、継母には馴染めず激しく対立する。一茶をかばってくれた祖母の死を契機に、15歳で江戸奉公に出され、流民同然の生活の中で世の辛酸をなめる。51歳でやっと郷里に帰り、翌年結婚。3男1女をもうけたが、相次いで妻子を失う。その後、再婚するも失敗。63歳で3番目の妻を迎えたが、翌年家を焼失。その翌年死亡。享年65歳¹⁰⁴⁾。

上記の事実を踏まえた上で、改めて以下の有名な俳句、とりわけ、①の句を鑑賞する時、「親のない子と言われた孤独な」¹⁰⁵⁾一茶の「弱者であることの哀

しさ、悔しさ、生活の苦しさ」をより一層深く理解できよう。

- ①「我と来て遊べや親のない雀」¹⁰⁶⁾ (「6歳の頃を思ひ出て」)¹⁰⁷⁾
 ②「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」¹⁰⁸⁾

それにしても、弱者のスズメに対する一茶の眼差しは何と温かいことか。ちなみに、小林清之助氏は「一茶は、スズメの子を巣びなのころから飼って、ひとり餌になるまで育てあげたらしい。一茶のスズメの子の句を一つ一つ拾い出して、スズメの成長順に並べてみると、これはもう、スズメを育てた者でなければわからぬようなことが詠み込まれている」¹⁰⁹⁾と述べて、以下のような句¹¹⁰⁾を紹介している。

- ①「雀子やものやるちご児も口を開あく」
 ②「慈悲すれば糞はこをするなり也雀の子」
 ③「雀子や人のこぶしに鳴なき初そむる」
 ④「雀子を遊ばせておくたたみかな豊哉」
 ⑤「雀子がざくざく浴るあび甘茶哉かな」

では次に、北原白秋(1885-1942)について見てみよう。この詩人・歌人の著した『雀の生活』(1920)は《スズメ文学》の白眉であるが、その内容について触れる前に、この高名な文人が体験した〈貧窮と苦悩の人生〉を概観してみよう。

明治18年、福岡県柳川市に裕福な酒造業者の長男として生まれる。早大中退；16歳、実家の酒倉全焼；19歳、中学中退。父に無断で上京し、早稲田大学英文科(予科)入学；24歳、実家破産；27歳、隣家の人妻松下俊子と恋に堕ち、姦通罪で告訴される。このスキャンダルにより満身創

痾となり、白秋の人気は地に落ちる。父母弟妹が白秋を頼って上京、一家全員故郷を捨てる；28歳、俊子と結婚。三崎の地に一家で移住するが、父と弟が事業に失敗、白秋夫妻を残して一家は上京；29歳、貧困と家族間の軋轢の故に俊子と離婚。31歳、江口章子と結婚；1920年（35歳）『雀の生活』を出版するも、またも窮乏を極める生活と家族間の軋轢により章子と離婚；36歳、佐藤菊子と結婚、1男1女をもうける。以後文人として大成するも、晩年は糖尿病と腎臓病合併症により殆ど視力を失う。享年57歳¹¹¹⁾。

以上の略歴から分かるように、白秋の『雀の生活』の背景には、実家の破産・人妻とのスキャンダル・名声と人気の失墜・長い貧窮生活と家族間の軋轢・再度の離婚という苦悩がある。この高名な文人もまた一茶と同様、人生の辛酸を経た苦労人でもあった。だからこそ、白秋は日々目にする身近な野鳥の中で何よりも〈最弱のスズメ〉に共感・同情し、この小鳥を判官贔屓するのである。苦悩の文人は「人間は寂しい、雀も寂しい、雀を思うと涙が流れます」¹¹²⁾と言いながら、スズメを称えて次のように言う。

雀を私は観ています。常に観ています。観ていると云うよりは、常に雀と一緒にあって、私も飛んだり啼いたりしています。雀は全くかわいい。彼は全く素朴で、誠実です。極めて神経が細^{こま}かで、惻巧で、時々慌てて、初^{うぶ}心で、単純で、それはあどけないものです。

鳥類の中の雀を、大概の人は、地上の石ころ同様に思っています。（それはあまりに多くいるからです。あまりに珍しくもないからです）。人間がそう観て平気なのは、人間そのものの愛が足りないか、或いは、その人間としての実在が、容易に雀の心と合致できないか、そのどちらかだと思っています。

雀、雀はかわいい小鳥です。彼を軽蔑する人間が果たして彼より誠実

で、彼より無垢で有り得るかどうか。雀を識るには雀と一緒にする事です。そうして雀になって了はなければなりません。愛が先ず結びつけるのです。私は雀と話をしたアッシジのフランシスを尊みます¹¹³⁾

人生に苦悩する白秋にとって、スズメは「貧者の宝」¹¹⁴⁾「貧しい人間の親友」¹¹⁵⁾「寂しい人間の慰め」¹¹⁶⁾「人間の世の光」¹¹⁷⁾であった。「私が雀か、雀が私か、雀を識る事私より深い人もあるまい」¹¹⁸⁾という白秋の自負の言葉は、換言すれば、この文人が「弱者であることの哀しさ、悔しさ、生活の苦しさ」を人一倍痛切に実感していたことの証左である。次の詩は、白秋の寒雀^{かんすずめ}を歌ったものである。寒雀と言え、巷間では古来「美味で、滋養に富む」¹¹⁹⁾食材と見なされてきたが、この詩にはそのような眼差しは微塵もない。有るのは自他の区別がつかないほど面前のスズメと一体となった詩人の姿である。

「雀」

いや高く、
さむざむと、まだ、
揺れのこる孟宗の^は秀の、
あはれ、その^は秀に、
^と留まりもあへぬ雀の、
一羽雀の、
揺られては、ちち、
吹かれては、ちち、
いづれは散りゆく日あしの
今は冬—— すぐに雨なり¹²⁰⁾

我が国にこのような《スズメを謳う文学》が存在するのも、この小鳥が弱者の「親友」、「慰め」、「世の光」とも見なされてきたからであろう。幼時より「舌

切り雀」の「報恩」奇譚を聞かされてきた日本人には、スズメは一方的な悪役とはなりえないのである。それは我々に身近な野草に付けられた名、「スズメノエンドウ」、「スズメウリ」、「スズメノカタビラ」、「スズメノテッポウ」、「スズメノトウガラシ」、「スズメノヒエ」、「スズメノヤリ」等を見ても明らかである。このスズメに対する愛情は、我が国の童謡にも反映されている。日本人なら誰でも知っているスズメにまつわる唱歌、それが「雀の学校」である。

13

「雀の学校」 清水かつら作詞・弘田龍太郎作曲

チイチイパッパ チイパッパ
 雀の学校の 先生は
 むちを振り振り チイパッパ
 生徒の雀は 輪になって
 お口をそろえて チイパッパ
 まだまだいけない チイパッパ
 も一度一緒に チイパッパ
 チイチイパッパ チイパッパ¹²¹⁾

この童謡を口ずさむ時、我々の脳裏に去来するのは遠い昔の幼年時代か、はたまた幼稚園か小学校に入ったばかりの嘴の黄色い新入生たちではあるまいか。それにしても、この唱歌に登場するスズメと英国の有名な伝承童謡、「マザーグース」の「誰がコマドリ殺したの」に登場する「殺人犯」のスズメを対比する時、そのイメージに何と大きな落差のあることか。「雀の学校」の生徒は「全くかわいい」、「素朴」、「初心で、単純」、「あどけない」弱者の幼児である。「お口をそろえて チイパッパ」と連呼しているスズメたちを想像すると、思わず微笑みが漏れてくる。この幼児を連想させる弱者のスズメを歌った今一つの唱歌が「すずめ 雀」である。

「すずめ 雀」 佐佐木信綱作詞・滝廉太郎作曲

すずめすずめ きょう 今日もまた

くらいみちを 只ただひとり

林の奥たけやぶの竹藪の

さびしいおうちへ 帰るのか

いいえ皆さん あすこには

父様とうさま かあさま 母様 まって居いて

楽しいおうちが ありまする

さよなら皆さん ちゅうちゅうちゅう¹²²⁾

竹に雀，「林の奥たけやぶの竹藪」，「さびしいおうち」と来れば，いかにも閑寂な墨絵の世界を連想させる。事実，白秋も「雀は閑寂の精霊」¹²³⁾にして，「雀の本質は墨絵の精神（である）」¹²⁴⁾と述べている。と同時に，この唱歌はたとえ貧者の「埴生の宿」であろうと，心優しい父母の居る〈幸せな庶民の家庭〉を連想させる。白秋は言う：「雀が家族的であり，民衆的なところが，雀をして如何なる鳥類よりも偉大ならしめ，勢力あらしめる最大原因かと思います」¹²⁵⁾。それにしても，この幼いた気たいな小スズメを見守る人間の優しさ！ 純真な農村の子供たちであろうか。ただ感動する他はない。

幼気なスズメの可愛さを知るには，春の巣立ちの頃が一番である。もし我々に少し足を止めて，しばし自然を観察する心の余裕があれば，人を見ても余り恐れず，動作も何処かモタモタしている可愛い小スズメを此処こ其処こで見かけることが出来よう。筆者もまた今春四国遍路の途中，徳島の国分寺で参拝を済ませ，車に乗り込んだ時，嘴の黄色い小スズメがフロントガラスのワイパーに止まって，何時までもこちらをキョトキョトと見つめていたが，その可愛い姿は筆舌に尽くしがたいものであった。スズメの平均寿命はせいぜい「1年半か2年」¹²⁶⁾である。かくも短い生を弱者のスズメは日々，天敵に怯え，多くの人間

に疎まれながら、必死に生きるのである。それを思うと、面前の子スズメが愛おしいばかりであった。

以上、英・米・日を中心にスズメが『聖書』、ギリシア・ローマ神話、『イソップ寓話』、民間伝承、文芸、童謡唱歌等々の世界で如何なる役を演じているか、見てきたが、その八面六臂の活躍と、この鳥にまつわるイメージ・シンボルは実に明・暗に富んだ多種多様なものである。それと言うのも、「人間のいる処には必ず雀はいます。雀のいる処には必ずまた、人間はいます」¹²⁷⁾ つまりスズメが古今東西、人間に一番身近な野鳥だからであろう。

それにしても、スズメを極悪非道の殺し屋と見なす「マザーグース」の欧米諸国でスズメが人間の手の平に止まって餌をついばむというのに、幼時より情操豊かな《スズメを謳う文化》に慣れ親しんでいる我が国では、そのような光景は絶えて見られないのは実に皮肉としか言いようがない。この彼我の違いの一要因として、我が国が古来瑞穂の国であり、スズメは貴重な「イネを食い荒らす害鳥」という背景があるのであろうが、このスズメ観が究極的には誤りであることは新生中国が学んだ貴重な教訓で見た通りである。

とは言っても、都市化の著しい当世の日本ではスズメを敵視するというより、「石ころ同様」のスズメなどには全く無関心な人が大方であろうが、これではスズメと人間との距離が縮まらないのも無理はあるまい。というのも、スズメは代々この瑞穂の国で人間に敵視、迫害されてきた受難の歴史を骨身に染みて知っているからである。だから、我々の方で一度心身をリセットして、心静かにスズメを観察してみるがいい。そうすれば、この小さな「民衆の鳥」の「哀しさ、悔しさ、生活の苦しさ」が理解できよう。そして、それが分かれば分かるほど、スズメに対する見方も変わるに違いない。

衣食住の細部を見れば一目瞭然のように、現代人は日々余りにも人工のものと関わり過ぎ、心身ともに汚染されている。このことから生ずるストレスや病を根本的に癒すには、たとえ名も知らぬ野花であれ野鳥であれ、意識して《自然とその生命》に触れる時を持つことではなかろうか。そのための一つとして、

スズメの観察は最適であろう。というのも、スズメは人間に一番身近な野鳥であると同時に、「これほど興味深い野鳥は他にはいない」¹²⁸⁾ のだから。「釣りはふな鮎に始まり、鮎に終わる」ように、「(野鳥観察は) スズメに始まり、スズメに終わる」¹²⁹⁾ のである。

最後に、スズメの名誉回復と古典落語の享受のためにも、仙台藩伊達家の家紋の一つは「竹に二羽飛雀」¹³⁰⁾であることを紹介して本論を終えたい。

注

- 1) ピーター・ミルワード『ミルワード氏の動物記』安西徹雄訳(新潮社, 1977), p. 169.
- 2) 志村英雄・山形則男・柚木修『野鳥ガイドブック: パードウォッチングのための市街地・野山・水辺の鳥 186 種』(永岡書店, 1999), p. 38.
- 3) 大田真也『スズメ百態面白帳』(葦書房, 2000), p. 6.
- 4) 唐沢孝一『スズメのお宿は街のなか: 都市鳥の適応戦略』(中公新書, 1989), pp. 174-6.
- 5) 井上義昌『英米風物資料辞典』(開拓社, 1972), p. 726.
- 6) 『朝日=ラールス世界動物百科 (鳥類)』69号(朝日新聞社, 1972), p. 13.
- 7) 大田真也『スズメ百態面白帳』, p. 6.
- 8) 唐沢孝一『スズメのお宿は街のなか: 都市鳥の適応戦略』, p. 174.
- 9) 吉田金彦編著『語源辞典: 動物編』(東京堂出版, 2001), p. 181.
- 10) 中村登流「イエスズメ」, 『世界大百科事典』(日立デジタル平凡社, CD-ROM 版, 1998)。以下『世界大百科事典』からの引用は全てこの版による。
- 11) 井上義昌『英米風物資料辞典』, p. 726.
- 12) 『朝日=ラールス世界動物百科 (鳥類)』69号, pp. 8-13.
- 13) 井上義昌『英米風物資料辞典』, p. 727. Cf. Dean Amadan, *Birds around the world* (The Natural History Press, 1966), p. 101: "The continental sweep of the House Sparrow and the Starling after their introduction in New York by man is well known."
- 14) 大田真也『スズメ百態面白帳』, pp. 177-8.
- 15) John Bull and John Farrand, Jr. revised by John Farrand, Jr., *National Audubon Society: Field Guide to North American Birds: Eastern Region* (Alfred A. Knopf, 2003), p. 752.
- 16) 唐沢孝一『スズメのお宿は街のなか: 都市鳥の適応戦略』, pp. 174-5.
- 17) Dean Amadan, *Birds around the world*, p. 33.
- 18) 'Goats employed in fight against Kuzu in US South', VOA, Special English, 7/31/2007 参照。
- 19) 小林桂助『標準原色図鑑全集 5: 鳥』(保育社, 1974), p. 5.

- 20) 故事ことわざ研究会編『動物の格言諺事典』（アロー出版社、1976）、p. 54.
- 21) 荒俣宏『世界大博物図鑑 第4巻：[鳥類]』（平凡社、1987）、p. 361.
- 22) 柳田国男『野草雑記・野鳥雑記』（角川文庫、1978）、p. 230.
- 23) 吉田金彦編著『語源辞典：動物編』、p. 140.
- 24) 小西友七・南出康世編集主幹『ジーニアス英和大辞典』（大修館書店、2001）参照。
- 25) 荒俣宏『世界大博物図鑑 第4巻：[鳥類]』、p. 361.
- 26) C. T. Onions, *The Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford University Press, 1966), p. 850.
- 27) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹、荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛共訳（大修館書店、1984）、pp. 593-4 参照。
- 28) J. C. クーパー『世界シンボル辞典』岩崎宗治・鈴木繁夫共訳（三省堂、1992）、p. 250.
- 29) 本論に於ける英語版『聖書』からの引用は全て *The Holy Bible, Authorized King James Version*. Electronic Text Center, University of Virginia Library による。
- 30) 本書に於ける日本語版『聖書』からの引用は全て、『聖書』（日本聖書刊行会、1974）による。
- 31) ピーター・ミルワード『ミルワード氏の動物記』、p. 171.
- 32) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』、p. 593.
- 33) ピーター・ミルワード『ミルワード氏の動物記』、p. 171.
- 34) ウイリアム・スミス編纂『聖書動物大事典』小森厚・藤本時男編訳（国書刊行会、2002）、p. 390.
- 35) 群れる理由については、大田真也『スズメ百態面白帳』、pp. 131-4 参照。
- 36) ウイリアム・スミス編纂『聖書動物大事典』、p. 392.
- 37) 同上の「序」、p. 4.
- 38) 大田真也『スズメ百態面白帳』、p. 71.
- 39) 小林清之助『鳥の歳時記』（真珠書院、1967）、pp. 206-7.
- 40) オウィディウス『転身物語』田中秀央・前田敬作訳（人文書院、1976）、p. 128.
- 41) 同上、p. 210.
- 42) 同上、p. 336.
- 43) カール・ケレーニイ『ギリシアの神話：神々の時代』高橋英夫訳（中央公論社、1981）、p. 94.
- 44) 矢代幸雄『随筆ヴィナス』（朝日選書、1974）、p. 65.
- 45) ロバート・グレーヴス『ギリシア神話（上）』高杉一郎訳（紀伊国屋書店、1981）、p. 37.
- 46) アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』、p. 185.
- 47) 『朝日＝ラールス世界動物百科（鳥類）』第99号（朝日新聞社、1973）、p. 2.
- 48) 'The Dove and the Crow' in *Aesop's Fables* (Project Gutenberg, 1994) の電子テキストに

よる。

- 49) *Aesop's Fables* Electronic Text Center, University of Virginia Library による。
- 50) *Aesop's Fables* A new translation by Laura Gibbs (Oxford University Press [World's Classics], 2002) from *Aesopica: Aesop's Fables in English, Latin & Greek* の電子テキストによる。
- 51) 中川芳太郎『英文学風物詩』(研究社, 1957), p. 696.
- 52) 同上
- 53) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, Edited by Iona and Peter OPIE (Oxford University Press, 1997), p. 151.
- 54) 奥田夏子・山崎喜美子・蒲谷鶴彦・川崎晶子『野鳥と文学一日・英・米の文学にあらわれる鳥一』(大修館書店, 1982), p. 2.
- 55) W.H. ハドソン『鳥たちをめぐる冒険』黒田晶子訳(講談社, 1977), p. 285.
- 56) William Henry Hudson, *Adventures among Birds* (J. M. Dent & Sons, 1951), p. 242.
- 57) 大田眞也『スズメ百態面白帳』, p. 121.
- 58) 加藤憲子『英文学動物話』(松柏社, 1964), p. 151.
- 59) 『朝日＝ラルース世界動物百科(鳥類)』69号, p. 13.
- 60) 小林清之助『鳥の歳時記』, pp. 216-7.
- 61) チョーサー『カンタベリ物語(上)』西脇順三郎訳(ちくま文庫, 1988), p. 28.
- 62) *British Poetry and Prose: A Book of Readings*, Edited by Paul R. Lieder, Robert M. Lovett and Robert K. Root (Houghton Mifflin, 1928), p. 57.
- 63) 木下順二訳, 『シェイクスピア大全 CD-ROM 版』(新潮社, 2003)。以下シェイクスピア作品の原文及び日本語訳の引用は全てこの版による。
- 64) 森鷗外訳
- 65) 三神勲訳
- 66) 中野好夫訳
- 67) 大山俊一訳
- 68) 大山敏子訳
- 69) 『英語歳時記(雑)』土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修, 成田成寿編集, 成田成寿執筆(研究社, 1970), p. 105.
- 70) 川和高斌『英鳥詩選』(泰文堂, 1971), pp. 28-32.
- 71) *Poems by William Blake*, selected with an introduction by Alice Meynell (Kessinger Publishing, 2008), p. 76.
- 72) 『ブレイク詩集』寿岳文章訳(弥生書房, 1974), pp. 39-40.
- 73) *Wordsworth's Poems*, vol. 1, Edited with an Introduction by Philip Wayne, M. A. (Everyman's Library, 1955), p. 134.
- 74) 川和高斌『英鳥詩選』, p. 34.

- 75) William Henry Hudson, *Adventures among Birds*, pp. 290-1.
- 76) W. H. ハドソン 『鳥たちをめぐる冒険』, p. 295.
- 77) Henry David Thoreau, *Walden, or Life in the Woods*, with Introduction and Notes by Kinsaku Shinoda (研究社, 1974), p. 276.
- 78) ソーロー 『森の生活：ウォールデン』 神吉三郎訳 (岩波文庫, 1983), p. 334.
- 79) Henry David Thoreau, *Walden, or Life in the Woods*, p. 309.
- 80) ソーロー 『森の生活：ウォールデン』, p. 382.
- 81) 同上, pp. 118-9.
- 82) Henry David Thoreau, *Walden, or Life in the Woods*, p. 83.
- 83) John Bull and John Farrand, Jr. revised by John Farrand, Jr., *National Audubon Society : Field Guide to North American Birds : Eastern Region*, pp. 752-3.
- 84) 同上, p. 753.
- 85) 『広辞苑 (第5版)』 (岩波書店, CD-ROM 版, 1998)。以下『広辞苑』からの引用は全てこの判による。
- 86) 同上
- 87) 『国語大辞典 (新装版)』 (Microsoft/Shogakukan Bookshelf, CD-ROM 版, 1988)。以下『国語大辞典 (新装版)』からの引用は全てこの判による。
- 88) 『広辞苑』
- 89) 同上
- 90) 『国語大辞典 (新装版)』
- 91) 同上
- 92) 同上
- 93) 故事ことわざ研究会編 『動物の格言諺事典』, p. 54.
- 94) 『国語大辞典 (新装版)』
- 95) 故事ことわざ研究会編 『動物の格言諺事典』, p. 54.
- 96) 『広辞苑』
- 97) 同上
- 98) 實吉達郎 『動物故事物語 (下)』 (河出文庫, 1988), p. 184.
- 99) 同上
- 100) 唐沢孝一 『スズメのお宿は街のなか：都市鳥の適応戦略』, p. 5.
- 101) 同上, p. 7.
- 102) 『国語大辞典 (新装版)』
- 103) 石川真弘 「一茶」, 『世界大百科事典』
- 104) 『新訂 一茶俳句集』 丸山一彦校注 (岩波文庫, 2000) の「解説：一茶の生涯」と『世界百科大事典』の「一茶」参照。
- 105) 『新訂 一茶俳句集』, p. 208.

- 106) 『一茶俳句集』丸山一彦校注（岩波文庫，1990），p. 208.
- 107) 『新訂 一茶俳句集』，p. 208.
- 108) 同上，p. 287.
- 109) 小林清之助『動物の四季』（小学館，1980），p. 26.
- 110) 同上，pp. 26-9 参照。
- 111) 『北原白秋詩集』（角川文庫，1999）の「年譜」参照。
- 112) 北原白秋『雀の生活』（新潮文庫，1994），p. 47.
- 113) 同上，p. 9.
- 114) 同上，p. 16.
- 115) 同上，p. 21.
- 116) 同上，p. 22.
- 117) 同上，p. 66.
- 118) 同上，p. 39.
- 119) 『国語大辞典（新装版）』
- 120) 安藤元雄編『北原白秋詩集（下）』（岩波文庫，2007），p. 182.
- 121) 『心のふるさと：童謡唱歌名曲集』（金園社，2007），p. 90.
- 122) 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』（岩波文庫，2000），p. 90.
- 123) 北原白秋『雀の生活』，p. 135.
- 124) 同上
- 125) 同上，p. 172.
- 126) 小林清之助『動物の四季』，p. 30.
- 127) 北原白秋『雀の生活』，p. 58.
- 128) 唐沢孝一『スズメのお宿は街のなか：都市鳥の適応戦略』，p. 13.
- 129) 同上
- 130) インデックス編集部編『新版 家紋から日本の歴史をさぐる』（ごま書房，2008），p. 91.